

「大学博物館式探究活動プログラム」の開発と試行

蒲生諒太（京都大学大学院 教育学研究科 博士後期課程）

1. 研究計画立案の背景と目的

現行の学習指導要領では小中高校それぞれに「総合的な学習の時間」が設定され、その内容として「探究的な学習」（「探究活動」）が記載されている。しかし、「総合的な学習の時間」には指定教科書がないため、一部の学校ではプログラムを組むことが出来ず、「お荷物」扱いを受けることも少なくなかった（森、2003）。

この問題の解決を念頭に、本研究では「すぐに使える教材」ではなく、教員の職能開発を視野に入れた「探究活動」の、「利用し学べるカリキュラム・モデル」を開発し、「ブックレット」にまとめることを目的とする。

2. 研究方法

先進校の事例をもとに、一般的な「カリキュラム」モデルとして次のような、中長期に探究能力を育成する「探究カリキュラム」モデルを整理した（図1）。

1 段階目は「準備」段階であり、次のステップに必要な「知識」と「スキル」を習得するものである。次の2段階目は「課題研究」段階であり、「課題設定」段階と「課題検証」段階からなる実際の研究活動である。

このような「カリキュラム」モデルを基本として、「課題研究」段階の「課題設定」、「準備」段階にフォーカスを当てて精緻化＝手法や効果

についての仮説を記述していく。その際、「課題設定」については研究協力を結ぶ高校での実践研究を、「準備」段階でのワークショップ作りは京都大学総合博物館協力のもと、博物館で利用できる探究プログラムの開発を目指す。

その一方で、このような「カリキュラム」モデルがどのような文脈＝学校現場で機能し活用されるのか、理解を掴まないと現場への適切な研究成果の還元は難しいと考えられる。そこで学校現場を対象に、参与観察・アンケート調査・聴き取り調査を行ない、「探究活動」が実施される学校現場の特徴を掴み、それにどのように対処すべきか、「現場への還元戦略」を検討し、「ブックレット」の編集方針とする。

3. 結果・成果

上記の手順で研究を進めていきながら得られた知見を整理し、それらに対して「ブックレット」をどのように作成したらいいのか、整理していった。表1はそれぞれの研究と得られた知見、「ブックレット」への反映ポイントを整理したものである。実践研究や学校現場の実態調査を踏まえた内容をもとに「ブックレット」を作成した（図2）。

表1 本研究で得られた知見と「ブックレット」への反映

研究テーマ	得られた知見	「ブックレット」への反映
1. 「探究カリキュラム」開発研究—「課題研究」	「課題設定」指導における困難なポイント 「課題設定」指導上のノウハウ	「課題設定」についての手法について詳しい事例を交えた解説の収録（第二部6章、7章）
2. 「探究カリキュラム」開発研究—「準備」	「社会教育」で蓄積された「アクティブ・ラーニング手法」の特徴と探究活動への応用可能性への理解 博物館を舞台にした3つのワークショッププログラムとそれぞれの特性及び転用可能性、博学連携のノウハウ	予備調査をもとに、探究活動の「準備」段階で利用可能なものを精選し追加して収録（第三部） 事例として本報告書で欠けなかった内容も合わせて収録（第四部）
3. 「現場への還元」戦略	現場におけるカリキュラム設計能力やファシリテーション能力の育成課題 「一般校」と「探究活動先進校」での「探究活動」の「ねらい」のギャップ 「探究活動」を支えるインフラの不安定さ	学修支援に必要な理論的実践的知識の収録（第一部） コンピテンシーベースで授業をデザインするための知識の収録（第二部） —

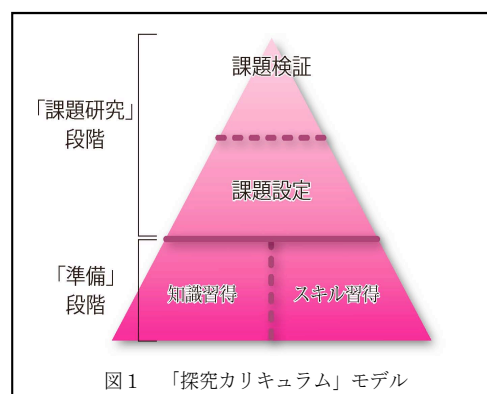


図1 「探究カリキュラム」モデル



図2 完成した「ブックレット」